紫裾濃大鎧の調査

宮司　黒田忠雄

現在　当神社が所蔵する国指定重要文化財紫裾濃大鎧の細部にわたる調査が、青梅市教育委員会の手により行われている。

調査の主たる目的は、青梅市が将来このような優品についての模造を作成し、青梅市民に、また市を訪れる人達に鎌倉期の素晴らしい文化財に身近にふれる機会を与えることにより、市民文化の向上に役立たせようとする考えによるものである。

現在、模造製作の予定は立っていないようであるが、先行しての調査として、先に青梅市で作成した赤糸威大鎧の復原模造に際し製作監修に当たられた山岸素夫、斉藤慎一両先生を中心に進められている。

申すまでもなくこの鎧は、当神社の御神宝として伝わるもので弘安の役（西暦一二八一）に際し、来襲する蒙古軍の撃攘を祈願して、鎌倉将軍惟康親王より奉納されたものと社傳に言う大鎧である。

しかも今回の調査経過の中で、社傳より製作年代は古く、当代の遺例中最も精巧なものであることが明らかになったとのことである。

当神社が蔵する畠山重忠公奉納と伝える国宝赤糸威大鎧は、日本三大鎧の一つとして夙に有名であるが、この鎧も製作年代は赤糸威大鎧に比べ百年ほど下ると見られるが、武蔵野の特産としても名高い紫草の根で染めた糸を用いた裾濃の配色は、貴族的でしかも優雅なものであり、赤糸威大鎧の豪放な姿とは、対照的な魅力を有している。

御嶽大神様のご神宝として、七百年の歴史を経る中で、徳川八代将軍吉宗公の上覧（一七三四）に供した事跡を始め、近くは日米講和条約の締結を記念して、昭和二十六年サンフランシスコで開催された日本古美術展に日本を代表する大鎧として、海を渡った記録も有するこの大鎧の詳細な調査報告書が待たれるところである。

現在、宝物殿に赤糸威大鎧と並列して常時展示してあるが、この調査の中で、常時展示することについて、将来にわたっての保存を考えた場合、問題があるとのご指摘もいただいており、当神社としても今後その方向で検討すべきと考えている。

なお、ご承知のことと思いますが当神社の所蔵する宝物につきましては、斉藤慎一先生の筆により、当紙にシリーズ（隔号）で、ご解説をいただいておりますので、是非ご覧になってください。

結成二十年を迎えた原島会

川崎市宮内御嶽講講元　石井朋男

原島会は、御嶽講講元世話人の親睦並びに御師原島家との連絡を密接に行うことを目的に、昭和五十四年十一月に発足いたしました。

初代会長になられました市ノ坪講講元の横山新太郎様は、この会の運営に際し、十年という長い期間御師原島様と連携され、結成十周年記念行事の大役を果たされて引退されました。横山初代会長は、会長を辞された四年後に残念ながら故人となられました。

二代会長には、大蔵御嶽講講元の須崎卓司様が就任され、初代会長のお築きになりました会の意図をご理解され、大変意欲的に行動し、会の発展に寄与されました。たまたま、健康を害されたために引退を余儀なくされました。

その後任として、皆さまのご推薦により私が会長を務めさせていただいておりますが、何分力不足ゆえ先代、先々代のような仕事ができるか心配をいたしております。

それぞれ講の所在地は違いますが、それらの講の講元世話人が毎年一同に会し、懇親を深め、また情報の交換を行うことができますのは、大変有意義なことであり、結成にご盡力を賜わりました先輩の方々に深く感謝しております。

今年は原島会が結成されて二十年の節目でございますので、記念の行事を盛大に行う予定でおります。

御師原島家では、昨年めでたく後継者を迎えられ、さらに今年はお孫さんが誕生なされ、誠にめでたい限りでございます。子孫が代々継がれること、このような繁栄が武蔵御嶽神社をはじめ御師そして諸講中に賜りますよう御祈念申し上げます。